

## 建築学教室創立 90 周年記念行事報告（2）シンポジウム

### 建築における教育・研究のビジョン—プラットフォームの構築—

竹脇 出（昭和 55）

21 世紀を迎えて、科学技術の発展、都市化・情報化の進展、経済・社会のグローバル化の進行、先進国における少子・高齢化や途上国における人口増加、産業構造の変化、地球環境問題の深刻化など、建築をめぐる状況は大きく変化しています。そこでは、情報過多による問題や環境破壊問題など、これまで人類が経験したことのない問題が露見しており、新しい学術体系や教育のビジョンが問われています。

一方、京都大学は平成 16 年 4 月に国立大学法人となり、加えて平成 16 年 9 月に大学院の建築学専攻、平成 18 年 9 月に都市環境工学専攻（建築コース）が桂キャンパスに移転し、学部と大学院を別々のキャンパスで展開しています。また、平成 21 年 4 月から建築士法の改正に対応した教育プログラムを整備し、さらに平成 22 年 4 月には大学院を建築学専攻に一本化した組織体制のもとで新たな教育・研究を開始したところ です。

こうした状況をふまえて、京都大学建築学教室 90 周年の記念事業の一環として、建築の教育・研究の展望について探求するシンポジウムを開催することにしました。この問題に取り組むには、大学と企業・行政・同窓生との有機的な連携が不可欠であることから、多彩な分野で活躍されている京大建築会の方々に参加して頂き、京大建築会や京大建築学教室などをはじめとする教育・研究のプラットフォームをいかに構築すべきかを描き出すことにしました。本会報にはその要約を示します。

日時：2010（平成22）年9月19日（日）

午後2時30分～午後4時15分

場所：京都大学百周年時計台記念館・

百周年記念ホール

パネリスト：

井上俊之（国土交通省大臣官房審議官、昭和 53）

高橋晶子（ワークステーション共同主宰・武蔵野美術大学教授、昭和 55）

常岡次郎（鹿島建設大阪支店、昭和 61）

真部保良（日経アーキテクチュア編集長、昭和 59）

山本和彦（森ビル副社長、昭和44）

コーディネータ：

竹脇 出（京都大学教授、昭和 55）



竹脇： 定刻となりましたので、京大建築学教室創立90周年記念シンポジウムを開催させていただきます。シンポジウムのテーマは「建築の教育・研究のビジョン—プラットフォームの構築—」です。私はコーディネータを務めさせていただきます昭和55年卒業の竹脇です。

最初にパネリストの簡単なお紹介をさせていただきます。向かって左側から、鹿島建設大阪支店の常岡次郎さん（昭和61年卒）、ワークステーションを共同主宰しておられます武蔵野美術大学教授の高橋晶子さん（昭和55年卒）、国土交通省大臣官房審議官の井上俊之さん（昭和53年卒）、森ビル副社長の山本和彦さん（昭和44年卒）、日経アーキテクチュア編集長の真部保良さん（昭和59年卒）です。

PDでは各パネリストに10分ずつプレゼンテーションを行っていただき、その後で討論を行うことにします。すなわち、Ⅰ. 21世紀の建築・都市環境の問題を解決するためには総合能力や対話能力が求められる、Ⅱ. 大学と社会の有機的な連携が求められる、という2つの論点のもとで、①これからの建築教育に期待するものについて述べていただき（具体的には、京大建築系で学んだことで何が役に立ったか、あるいは

自らの実践を通じて何を学んでおく必要があるのかをお話いただき)、②大学と社会の有機的連携のあり方について述べていただきたいと思っています(具体的には、プラットフォームとしての京大建築会・建築学教室の役割など)。

最初に、常岡さんからお願いします。

**常岡次郎**：1986(昭和 61)年卒業の常岡です。1988(昭和 63)年に修士課程(中村恒善研究室)を修了し、同年に鹿島建設に入社しました。関西支店現場配属となり、以後幾つかの現場所長を経て、現部署に勤務しております。

#### <建築生産をめぐる多様な要素とその統合化>

勤続約 20 年間のうち、15 年現場におり、5 年支店管理部門におりました。20 年前に教育を受けましたので、記憶はあまり定かではありませんが、何が役に立っているかについて少し考えました。在学中は、建築計画、設計・意匠や構造などの方面で多くの先生や先輩方と交わらせていただき、多感な時期に建築を巡る多様な思想や知識と接することができました。この経験が施工管理者としての現在の自分の基礎となっていると思います。また、多くの先生方から教授された価値観が役に立っていると思います。



施工管理は、発注者や設計者の意図を汲み取りながら、時間やコスト、社会環境といった様々な制約条件の下、何十年の使用にも耐える建物を造るための要素技術の集積が要求されます。工程管理やコスト管理といった、各専門技術の統合化手法についての研究や教育が求められます。大学では、これら一つ一つの要素の意味について学ぶことができたと思います。プロジェクトでは種々の制約のもとで、ある決め

られた評価基準に基づいて作業を進めることとなります。

#### <リクルーター活動を通じて>

大学との関わりではリクルーターとして毎年学生の方と接していますが、施工を希望する学生でも施工実務の実態についてはまず無知であると感じております。建築学生の多くが建築生産の場に関係することを勧誘し、施工実務に関する教育を手厚くしてもらいたいと希望します。また、学生の多くは建設業界がおかれている環境や課題について殆ど認識していないと思います。彼らや彼女らに、もっと危機感と自分達が解決しなければといった使命感を持たせるような刺激と機会を与えていただきたいと思います。

#### <大学と社会の連携について>

最後に、大学と社会の連携(プラットフォームとしての京大建築会の役割)について述べたいと思います。今の建設業界は、社会や経済環境の大きな変化に対応しきれず、多方面で硬直化の傾向にあると思います。これらの課題解決のために、産官学からの OB によるオープンな共同研究会を開催し、社会に積極的に発信する機会を設けるべきであると思います。建築は経験産業であります。昨今では管理組織の縮小やいびつな世代構成、また団塊世代の大量リタイヤから企業内での OJT 教育が機能不全に陥っていると思われます。従って、諸先輩方の貴重な経験や知識を、広く多くの人に伝承できるような機会を設けては如何かと存じます。以上で私の発表を終わります。

竹脇：次に高橋さんお願いします。

**高橋晶子**：現在横浜にアトリエ事務所をもち、武蔵野美術大学で教えています。スライドを使用する前に建築教育に期待するものについて少しお話ししたいと思います。

#### <京大と東工大大学院と>

私自身、京大でしっかり学んだ自信はありませんが、各教授の「知的好奇心」や「情熱」は、折に触れて感じてきました。先ほど川上先生をお見かけしましたが、川上先生が授業の中でご自身の研究のお話をされておりまして、先生がどれだけ熱心にそのお話をされようとしていたかということはしっかり伝わってきました。

私は学部時代に、篠原一男さんという好きな

建築家ができて、東工大大学院（篠原一男研究室）に進学しました。大学院では価値観を同じにする先輩、後輩に恵まれて、ホットなインキュベーションの環境だったと思います。

同じ価値観をもつ先輩後輩に恵まれ、自分自身が活性化したと思います。6年間在籍し修了後もOB会等で定期的に大学を訪れ、研究室で進行中のプロジェクトを議論し情報交換する機会を持ってました。篠原一男さん、坂本一成さん、そして塚本由晴さんという東工大の建築家教育の流れの中には、研究室で設計しながら研究も重んじる部分があると思います。成果を方法的に持ち込むというより、設計と論点が繋がる調査研究をする、また研究に伴う問題発見力を重視する側面が強いのと思います。くり返される論争や思想が、つくられる建築を伴って乗り越えられていくというイメージは現在も東工大にあり、一種の血統を感じることができます。

### <五感で感じる建築を求めて>

大学時代、フィジックスは苦手と思い込み距離をおいてしまったことが残念です。環境要素（光・熱・風・音・・・）のふるまいをデザインと一体的に捉える視点は当時なかったと思いますが、設計で「現象」にコンシャスになれば学びは必須だったと思います。環境建築という社会的ニーズもありますが、五感で感じる建築をつくりたいと個人的には思います。

### <建築の文化的価値を伝える役割>

次に大学と社会の有機的連携についてお話したいと思います。建築の文化的価値を一般に伝えることが必要と考えています。今後重要性が増すのは、建築の価値を多くの人にさまざまな切り口で伝える努力を続けることではないかと思います。文化資源として再評価する、ありそうでなかった場所を創るなど、建築の魅力を伝える拠点として、大学はメディア的な役割を担っていくと期待します。

### <建築の教育・研究のあり方を問う事例>

今回、今後の建築の教育・研究のあり方を考える上で参考になると思われる事例を2つ持ってきました。一つ目の事例はアートサイト八郷（2010）です。これは、大学の造形演習（1年生）の一環であり、原寸制作物を田園で設営しています。里山の優雅な風景ではありますが、アートで何かできないかと考えています。電柱

がなく時代劇の舞台にでもなりそうな場所です。この作品は建築学科の作品ではなく、芸術系の学科の作品です。学生は泊り込んでイベントを企画することになり、竹で編んだ作品を卒業作品として作り上げます。

二つ目の事例は黄金町 Architecture Planet Project（2010）です。地域再生と設計業務、大学の実習のリンクが特徴です。自分の事務所と学生がコラボレートした事例であり、本来ならば改修しないような物件を改修しています。学生の手が入り、インターンシップとしての実習となっています。来月号の新建築号に掲載予定であり、かなり忙しい現実の社会とどのように対応していくかが課題です。



### <問題を発見する能力>

総合能力や対話能力というのは、ただ協調性がある、まとめがうまいというのではなく、問題の的確に発見するという観点が重要だと思います。問題意識を共有できると異種領域の専門家とも対話・協働できると思います。その際、自分ができることをわかりやすく示し、自分から乗り出していく積極性が問われると思います。

竹脇：次に井上さんお願いします。

井上俊之：国土交通省で住宅局を担当しています井上です。今日の機会を与えていただきありがとうございます。昭和53年卒で昭和56年に入省致しました。

### <バックグラウンドとプラットフォーム>

まず、大学で何を学んで役立ったかについてお話したいと思います。建築学は偉大な雑学だなという実感があり、広い拡がりがある特殊な学問だなと感じたというのが率直な感想です。

今でもその実感は変わっていません。設計をやって役に立ったと思ったことは、長崎県で住宅の仕事に携わったときです。雑学をしながらバックグラウンドを作り上げることが重要であると思います。今でもバックグラウンドは確実に役に立っていると感じています。

京大建築会に何を望むかについては、京大の特徴は群れないことだということですが、オープンな形で提案をしていただきたいと思います。京大建築会のプラットフォームについて考えるならば、建築界だけでなく、また京大だけでなくオープンな形で提案をしていただきたいと思います。

### <建築士制度の見直し>

時間が限られていますので、テーマを絞ってお話したいと思います。皆様ご存知のように建築士制度の見直しが行われましたが、85周年記念総会が行われた5年前の11月に1人の建築士が構造計算書という証拠の残るものについて偽装を行ったことに端を発します。1人の建築士の問題であるかどうかわかりませんでしたので、サンプル調査を行いましたところ、いくつも見つかるという事態となりました。それに関連して建築士法等の見直しを行うこととなりました。これが住宅瑕疵担保履行法に基づく資力確保措置へと繋がりました。

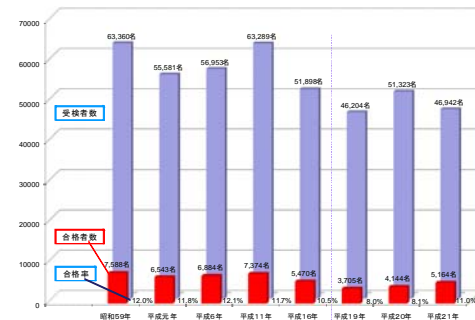
建築の専門家が多数おられますのではばかられますが、建築士法等の見直しについて資料に基づき少し説明したいと思います。当時、罰則が軽いのではないかという意見もありました。また、はんこを押しておいて自分の設計した物件だが構造は知らないといった事例もあり、訴えられた方もおられます。つまり責任の分担について議論があり強く問われたということです。平成19年6月には建築士法等の見直しを行うこととなり、適合性判定確保の制度改正がありました。現在も見直しを行っているところです。

建築士試験制度も見直し、これまでは、大学の学科（専攻）を出れば認可していましたが、今後は履修科目ごとに届出を行っていただき認定することにしました。既得権を侵すこととなるため、大学からもいろいろな意見をいただきました。さらに、実務経験とは何かについても議論しました。住宅局でも、営繕業務、建築確認関係だけを実務経験として認めることにしま

した。地方でも同じです。また、大学院の教育でも改正を行い、1年コース（4単位）と2年コース（14単位）を設けました。大学でインターンシップ教育を行うことは大変だと思います。時間が押してきましたので、少し資料としてあげましたデータを見てみたいと思います。1級建築士の合格者の割合を分析した結果を資料に掲載しています。大学卒業者の割合が増加し、年齢も高齢化していることがわかります。また、設計事務所関係の方の比率が増加していることもわかります。簡単ではありますが、これで終わらせていただきます。

### 建築士制度をめぐる最近の動き 国土交通省

Ⅲ-6 一級建築士試験合格者数等の推移



竹脇：次に山本さんお願いします。

山本和彦：昭和44年卒の山本です。当初は住宅公団にいましたが、その後、森ビルで30数年やってきました。私の本日の話の内容が皆さんの関心と異なるのではないかと心配しております。大学で学んだことで役に立ったことですが、大学時代に建築を学んでスケール感などを養えたことがよかったと思っています。

### <建築をとりまく状況の劇的な変化>

建築をとりまく状況は、近年大きく変化を遂げています。かつては、建築は買い手＝使い手であり、オーダーメイドにより作られてきましたが、今はレディーメイドが主流であります。更に、建築は建てる人・所有する人・運用する人が分化し、収益不動産、金融不動産になってきました。不動産とは土地に付着した資産ですが、同時に証券化され、デジタルで瞬時に世界中どこでも取引可能になりました。グローバル化、デジタル化が大きく変えたのだと思います。現在、都市をどうするかが問われているのだと思います。



### <都市建築に携わる人材の育成を>

今まで建築に関わっていた人々はこのような流れに遅れ、不動産取引は建築の質への理解の足りない金融関係者がリードしていると思います。しかも、サブプライムから発生した今回の金融危機のように、不動産自体が経済に与える影響も大きいといえます。過度な経済変動を防ぐためにも建築、不動産の価値を理解できるものが都市建築以外の様々な分野で活躍していくことが重要となると思います。大学には、こうしたことも踏まえた「都市建築」の教育を期待したいと思っています。

現在、国際社会における日本の存在感が危ぶまれています。活気ある市場の維持、優秀な人材の確保、国内の都市は国内の都市間競争ではなく、世界都市と競争していかなくてはならないのだと思います。そのために、都市建築に携わる者の役割は重要だと思います。世界からみて魅力的な都市をつくる、そのためには先述の金融知識や文化芸術など、都市建築に限らず、幅広い知識と教養を身につけることが大切だろうと思います。また、大学は留学生など海外からの優秀な人材も積極的に受け入れ、人材のプラットフォームとして機能していくことが望まれます。

### <都市の魅力高める複合開発>

今後はアジアの大都市の競争の時代になると思います。これからは知識情報産業が経済活動の中心になっていくと思いますが、そこでは都市の魅力が非常に大事になってきます。その点では東京は結構いいところにいてるのではないかと思います。今の都市の魅力度というのはニューヨークが一番、ロンドンが二番、パリが三番目、東京は四番目になっています。しかし、現在アジアですごい勢いで都市が広がっていますので、このアジアの中で東京がこれからもこの位置を保てるかどうか、これが日本の経済に非常に大きな影響を与えるのではないかと考えています。そういう中で都市の魅力度をさらに高めるためには「複合開発」というのはものすごく大事じゃないかと考えています。

今まで建物ほどちらかというと単一機能にしたほうが効率的だと考えてきましたが、複合化をうまくやることによって相乗効果を生み、全体としての価値を上げることが重要になってい

ます。これは六本木ヒルズの例ですけれど、これだけ複雑な用途を組み合わせています。



### <タウンマネジメント、コーディネーション>

それから建物を建てるだけじゃなくて、できた後をどうやって運営するか、これも非常に大切なことです。六本木ヒルズではコンサートや海外アーティストのパフォーマンスなど、様々なイベントを行って価値を持続する、サステナブルであり続ける努力をしています。

こういう建物を作るためには世界からいろいろな建築家を招いて、彼らと共同で作業するわけです。ご承知のように建築家というのは一番エゴイストというか、非常に個性の強い方ですから、そういう建築家をコラボレーションさせるコーディネーション能力も求められているということをご理解いただきたいと思います。

### <京大建築会の役割>

以上のように、建築の世界は大きく変わりつつあります。こういう変化に対応するために、大学、企業、学生をうまくつなぐ役を大学にもぜひお願いしたいし、京大建築会はそういう役割を担っていくべきではないかと思っています。私は東京支部長をやっていますが、その中でもできるだけ大学の先生に支部の集まりに来ていただいて、交流を増やしていくことを考えておりますのでよろしくお願いたします。

竹脇：最後に真部さんお願いします。

真部保良：現在、日経アーキテクチュアの編集に携わっております。大学では建築の勉強はあまりしませんでした。片足は建築に置いているのですが、もう一つは経済界を向いているといえます。アイデンティティをそこに見出している

のです。私自身、今回の PD の主旨に共感しております。プラットフォームという言葉は、コンテンツの基盤という意味でメディアに通じると思います。私たちが模索しているところがあり、今日の PD を通じて勉強したいと思っています。

### <経済社会の中に建築を位置づける>

日経アーキテクチュアは9月に紙面をリニューアルしました。発刊当時は日経新聞の子会社でした。今後は建築のビジネス情報を強化したいと考えています。建築の分野を経済社会の中でのビジネスパートナーとしての位置づけと考えています。建築を経済社会とのかかわりから斬る雑誌をつくっている立場から見て、建築と社会とのギャップをなくしたいという建築界の積年の願いと裏腹に、距離はあまり縮まっていないのが実状ではないかと感じております。

### <編集長インタビュー～日本 IBM、ユニクロ>

最近の紙面において、日本 IBM の社長に登場していただきました。日本 IBM というこれまで建築とはあまり関係ないと思われていた分野から参加いただきましたが、刺激的な話を伺うことができました。日本 IBM の社長は、建築単体ではなく都市として捉えておられると思います。また、まわりとのつながりを重視していると思います。プラットフォームの価値を重要視しており、これまでの価値観とはまったく異なるブラックボックスとして捉えているのだと思います。



ユニクロの社長にもインタビューしました。世界に発信するビル（建築）が大事なのだと言っておられました。建築のパートナーを探しているようで、クライアントの意図を理解してくれるパートナーとパートナーシップを結びたいと考えられているようでした。

建築や街づくりのプレーヤーとして、IT 分野などの先端企業が参入し始めたといえます。しかし大半の建築専門家は、まだ彼らとコミュニケーションがとれていないと思います。彼らの目には、一つの建築物の価値を高めようとする行為は、街のスケールでの「部分最適」としか映らないのだと思います。街の「全体最適」に重きを置く彼らとの距離は、このままでは開き続けるのではないかと思います。時代の荒波に揉まれて修羅場をくぐり抜けてきた先端企業の、下請け産業化するリスクさえも考慮しておく必要があると思います。

### <揺らぎを許すプラットフォームの可能性>

プラットフォームという言葉は、コンテンツの基盤という意味でメディアに通じると思います。メディアの現状、特に雑誌を含むマスメディアは存亡の危機に直面していると思います。一方でソーシャルネットワークの新ツールが続々と生まれているのも事実です。情報の発信者と受信者の線引きが意味を成さず、発信者の意図と無関係に受信者が情報価値を見いだすような世界だといえます。

最近、twitter, facebook など新しいメディアが出てきています。到達点を定めてからではなく、その場その場で使える tool も考える必要があると思います。京大建築会の運営でも参考になるかもしれません。

枠組みを固定した一方的な情報発信に、将来性を期待するのは難しいと思います。枠が揺らぐこと、プラットフォーム自体が変形することも許容するような基盤なら、もしかしたら新時代の魅力的なプラットフォームになれるのかもしれないと思います。

### ディスカッション

竹脇：それでは、これから討論に入りたいと思います。最初に、資料集について説明させていただきます。資料1の建築系学科・専攻の歴史

に続いて、資料2に日本技術者教育認定基準（JABEE 基準）と京都大学工学部建築学科の対応を掲載し、京大における具体的な学習・教育目標を掲げています。資料3は大学院講座構成、資料4は建築学科のカリキュラムです。資料5～資料7には、出生数や人口構成の推移、大学への入学者数・進学率の推移を、資料8には、

産業構造の変化を示しています。これらの資料から、学生の資質の変化や社会的な受け皿の変化等を読み取ることができます。

現在、建築学科の定員は80名であり、そのうち女性が3割～4割程度在籍しています。また、大学院へも75人前後が進学するようになっており、事実上の6年一貫教育に近いかたちになっています。こうした社会的状況のドラスティックな変化をふまえて、京大建築学教室がめざすべき教育・研究の方向を考えるにあたって、「プラットフォームの構築」をサブテーマとしてPDを行うことにした次第です。その結果、研究と実践（理論と実務）、大学と社会、部分と全体（建築と都市・社会）、メディアとしての大学、人材のプラットフォームとしての大学、異分野とのコラボレーションなど、様々な論点が具体的に浮かび上がってきたように思います。

一通り他のパネリストの発言をお聞きになったわけですが、それをふまえて補足したいことがありましたら、お話しただければと思います。



#### <建築の品質確保の問題>

**常岡**：建築の技術品質確保に対する社会の不信感が広がっていると感じております。これまでは1級建築士が設計している、あるいは大手の建築会社が設計しているということがお墨付きとなっていたのではないかと思います。社会の不信感についてメディアの世界におられる方にお聞きしたいと思います。

**山本**：国内的には品質のことは言われていますが、海外では日本の品質は定評があると思います。日本におけるそのような評価は世界におけるものとは異なるように思われます。

**真部**：日経アーキテクチュアの最新号は、技術一流国再生というタイトルで考えています。耐

震技術などの日本の一流技術の再評価を行っており、技術そのものではなく、ソリューションとしての評価が重要であると考えています。クライアントが求めているものに対する提案が求められていると考えています。

**井上**：偽装問題は建築界に対する不信感が極限に達したものと考えています。マスコミが取り上げるたびにどこにでもミスはあると思います。大手の会社でも簡単なミスを犯すこともあります。日本の技術は素晴らしいと思いますが、社会からの目に対して十分配慮する必要があると思います。

#### <教養教育の問題>

**竹脇**：先ほど幅広い知識あるいは教養教育が重要であるという議論がありました。高橋さんからは問題発見能力の重要性についても話がありました。最近は大学の組織改革も考えられていると聞いています。高橋さんから教養教育について付け加えることはないでしょうか。

**高橋**：大きな枠組みについて考えてきたことはありませんが、小さなアトリエ事務所（設計事務所）であるからこそ考えられたことがあると思います。相対的な視点から眺められたことは意味があると考えています。建築は雑学、総合の学問であり、時間がたっぷりある大学時代にマイペースで教養を勉強し好奇心に基づき学習しておく必要があると思います。また垣根なく話し合える友人の存在は重要であると思いますので、是非そのような友人を作られることを期待します。

**竹脇**：85周年記念シンポジウムの時の講演で、中村先生からリーダーには人間的魅力が重要であるという話があったと記憶しています。

プラットフォームの構築の一環として、最近京大建築会HPのリニューアルを、門内先生を中心に行っていただきました。大学と社会の間に京大建築会があるという考え方に基づいて、プラットフォームの一つの形式を実現しようという試みと言えます。

各パネリストから多くの論点を提示していただきましたので、建築の教育・研究のビジョンやプラットフォームの構築に関する課題なども少しずつ見えてきたように感じています。ここで会場の皆様からご質問・ご意見等をお願いしたいと思います。





### <都市的スケールの問題>

**金澤成保**：1975（昭和50）年卒業の金澤と申します。資料の教育目標、カリキュラムの構成を拝見していました。山本さんと真部さんの話は、重要なポイントではないかと思いました。カリキュラムを拝見していると建築の技術・設計と関係するものはありますが、都市的なスケールでどのように考えるかという視点が少し弱いのではないかと感じました。建築の技術だけでなく、都市的なスケールや社会経済的な観点、国際性をはじめとして新しい観点が重要と思います。私が学生で在籍していたころの西山研究室では、そのような議論を活発に行っていました。都市計画、都市開発、まちづくりとか、建築とか設計という狭い意味のものではなく、非建築的、非物的、非現実、非日常などを議論する場があったように思われます。10-20年先の教室の教育をどのようにしていくのかといった議論がほしいと思います。教育目標なども掲げられていますが、教室の先生方はどのようにお考えでしょうか。

**竹脇**：資料に教育目標が掲げられていますが、資料に記載されている教育目標などは限られた枠組みで纏められたものであり、JABEEへの対応として作成しています。大学の独自性、個性がそがれているところがあると考えています。独自性を出していく必要があると考えています。

### <深く掘り下げることを教える必要性>

**上谷宏二**：大変興味深く聞いています。パネラーの皆さんが言われることはよく理解できました。雑学なども重要であることは理解していますが、学問的基礎、ものの考え方の根本を如何に教えるかが重要で、突っ込んだ議論が必要と考えています。長い人生を生きていく上で、大学でないと教えられるものがあると考えてい

ます。パネリストの方々のように社会で活躍されている方のご意見はその通りと思っていますが、根の部分も必要と考えています。

**山本**：先生の言われる通りだと思っています。私はいつも社員に「T字型人間」になれ、と言っています。一つ深く掘り下げたものを持つと同時に、幅広いことにも興味を持つということです。深いものを持っていると、仮に知識がなくてもおおよそのイメージができるからです。

**竹脇**：ありがとうございます。時間が押ししておりますので、前回講演をしていただきました中村恒義先生に最後に一言ご意見を頂戴してもよろしいでしょうか。前回は同様のテーマでしたので、その観点からお願い致します。

### <社会から提起された問題にどう答えるか>

**中村恒善**：現役の方は発言されないのでしょうか。これまでの議論はかみ合っていないように思われます。山本さんと真部さんの話は、時代の最先端のニーズを描き出されて先を見据えたもので的を得たものであったと思われます。山本さんの発言は現役の先生に課題をつきつけられているように思います。現在、Solutionを見出す能力、構成する能力を養成する教育をなされているのでしょうか。分析的な研究ではなく総合的な研究、solutionを構成するような教育をされているのか伺いたいと思います。現在50歳前後までの教室の先生方が、10-20年先の教室の教育をどのようにしていくのかについて意見を出されるべきではないでしょうか。研究教育のビジョンを論じているわけですから。



### <建築学教室の教員からの発言>

#### ○計画系

**門内輝行**：実行委員長という立場もありますので、発言は控えていました。山本さんや真部さ



んの発言は新しい社会の動きを捉えていると思います。先ほど都市的スケールを考えるべきというお話が出ましたが、建築学教室でも都市計画、都市景観も含めた研究・教育の方向性についても十分に認識し考えています。

私個人としては、特に都市の景観とか街並みといったエリアのマネージメントやデザインの問題に関心を持っています。ミクロな建築とマクロな都市の間のコミュニティくらいのスケールの都市ガバナンスの問題ですね。現在では、個別の敷地主義の立場では、建築の問題の本質を捉えることはできないと考えています。先ほどお話がありました「複合開発」についても考えています。問題を解くレベルを個のレベルから集団のレベルに上げると、環境、景観、居住といった多くの問題を同時に解決する可能性が見えてくるわけです。しかし、このときそういう複雑な設計問題を解くことができる能力を備えた人材をどのように育成するのかという課題が浮かび上がってきます。

そのために研究室レベルでは、教員が学生に背中を見せながら、学生と一緒に問題に取り組んでいますが、専攻・学科レベルで考えますと、教員間の連携あるいは教員人事の問題なども関係してくると思います。

私は現在、京都大学グローバルCOE「アジア・メガシティにおける人間安全保障工学拠点」の活動に関係し、他専攻等の教員と連携して、都市の問題をアジアという広がりの中で考えるプログラムに取り組んでいますが、それだけではなく、カリキュラムにまで踏み込んで、都市計画を含む複雑な設計問題に取り組む人材を育てていきたいと考えています。

私は計画系の教員ですから、次に構造系の林先生から発言をお願いします。

#### ○構造系

**林康裕**：構造系から話をしたいと思います。私は構造系ですが、「建築保存再生学」という、構造か計画系か分からない名前の講座にあります。今から思えば、講座名は「建築・都市保全再生学」としておいていただいたほうが個人的にはよかったのではないかと思います。私は基本的に構造系の領域の中にとどまるべきではないと思っておりまして、計画系のこともわかっていかないといけないし、問題によっては

構造系が先頭に立って活躍できるような時代をつくっていきたいと思っております。これからは構造系だけで進むことはできず、計画、環境との連携などが重要と考えています。

私自身は、集落に入って構造的な調査をし、構造的な観点からの調査を通して、住民の思いとか暮らしぶりを見ながら構造系の専門のことを考えるような教育をしていきたいと考えています。そういう広い視野をもった構造系の学生を教育していきたいと思っています。

#### ○環境系

**高橋大武**：環境系についてお話をさせていただきます。環境系ではご存知の通り、音、光、熱のことを扱っています。環境系の基本は、物理現象をとらえることです。それを深く掘り下げないと、都市の環境問題、あるいは住宅の問題もそうですけど、なかなか前に進めない。

その辺を理解して広い視点に立って物事を変えていくところが、京大の環境系の伝統だと思っています。その上で、今は都市空間に広がりの中で、アジアや世界の広がりの中で、環境の問題を捉えていく必要があると思います。そのためには、講義の場だけではなくて、研究室の中で一対一の対話を通じて伝えていくといった方法を工夫し、広い視野をもった人材を育てていくようにしたいと考えています。

**竹脇**：それでは、これで90周年記念シンポジウムを終わりたいと思います。パネリストの方々に拍手をお願い致します（拍手）。

